

2023年 3月12日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

説教「父よ、彼らをお赦しください」 ルカによる福音書 23章32-38節 高橋彰

◆十字架につけられる

23 ₃₂ほかにも、二人の犯罪人が、イエスと一緒に死刑にされるために、引かれて行った。₃₃「されこうべ」と呼ばれている所に来ると、そこで人々はイエスを十字架につけた。犯罪人も、一人は右に一人は左に、十字架につけた。₃₄ [そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」]人々はくじを引いて、イエスの服を分け合った。₃₅民衆は立って見つめていた。議員たちも、あざ笑って言った。「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」₃₆兵士たちもイエスに近寄り、酸いぶどう酒を突きつけながら侮辱して、₃₇言った。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」₃₈イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王」と書いた札も掲げてあった。

聖書 新共同訳(C)日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987, 1988

今日と再来週でイエスの十字架上での言葉を二つ取り上げます。矛盾するかのような二つの言葉、赦しと呼びから、わたしたちは十字架につけられたイエスに出会い直し、そこに隠され、また示されている神のメッセージを聞き取りたいと思います。

イエスの十字架は、神の贖いの美しい業であるかのように描かれているのではありません。十字架につけられたイエスはどのような扱いを受けていたのでしょうか。あまりにも過酷な状況です。しかも体の痛み苦しみ以上のことが多く書かれてもいます。イエスは「犯罪人の一人にされ」ました。そのイエスを多くの「人々」があざけり、侮辱します。「人々」は「祭司長たちと議員たちと民衆」(23:13)にさかのぼりますが、彼らばかりでなく、あえて多くの人を指す言い回しをルカはしています。人びとはくじを引いてイエスの服を分け合います(詩22)。衣服をはぎ取ることは、その人の人格、尊厳を奪い、人道的配慮を行わないことでもありました(出22:25)。そして他人の死で利を得ようとする人間たちの罪深い姿を暴きます。

ユダヤの議員たちは苦しんでいる姿をあざ笑い、あざけりの言葉を発し、ののしり、さげすみ、侮辱の言葉を浴びせかけました。力の象徴的存在であるローマの兵士たちはその非力を侮辱し、自分自身を救ってみろと挑発しました。

十字架刑が何かということが明らかになります。それはただ死刑という刑罰の処刑遂行の方法ではありません。それは恐怖による支配の道具だったのだと。ローマ帝国の権力に反抗する者に対する警告のしるしでもありました。ローマ人が他の民族に対して優越しているという力の誇示。処刑されるのは一人であっても、それは全ての民へのメッセージとして向けられており、人びとはその恐怖にとらわれ、その罪深い思想や業に加担し、目をふさいでしまうのです。

イエスは誕生のその時から、ローマの支配による世界で(2:1-)、イエスの「いる場所がなかった」と書きました。ルカは最後の時まで、イエスが人びとの間で拒絶され、否定さ

れ、居場所がないことを記します。そうして肉体的痛みにさらに大きな苦痛を受けられたことを記すのです。そして人びとは今に至るまでそのように、自分たちの間に主なる神を受け入れず、認めず、拒絶しているのです。

黒人神学者ジェイムズ・H・コーンは『十字架とリンチの木』で、イエスが受けた十字架刑と、アメリカで黒人たちが受けた差別と暴力の仕打ちである「リンチの木」とが構造的に驚くほど共通することを指摘しました。キリスト教社会であったアメリカで公然と白人優越の人種主義がまかり通り、黒人たちはリンチを受け、それが正当化され無視され続けてきたと。十字架は差別と暴力に苦しむ黒人を助けなかった。それなのになぜ、黒人たちの中でも多くの人びとが、神を拒絶し、十字架に背を向けることをしなかったのか。むしろ信仰と歌が、黒人たちが苦しみに耐え、抗い、いのちを生き延びることを支え続ける原動力にもなってきたのです。

敵意と憎しみの中でイエスは「父よ、彼らをお赦しください」と祈りました。不当な差別と暴力、取り込まれずに抗い、憎しみから自由な者として生きられました。コーンは「赦しとは、弱さでも無抵抗の態度でもない。それは靈的な抵抗であり、憎しみへの反逆なのだ」と記します。十字架の上こそがこの世の価値体系を逆転させる場所でした。「抵抗を生み出す黒人の靈性は、白人優越主義によって破壊されることはない」「十字架が逆説的な宗教的象徴となるのは、それがこの世の価値体系を反転させるからである。打ち負かされることから希望は生まれ、苦しみと死は最後の言葉にあらず、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる…黒人キリスト教徒が、その苦しみと痛みの大きさにかかわらず究極的には「この世の難難」に屈しないと信じることができたのは、イエスの十字架があったからなのだ。力をはぎ取られた無力の人びとにしか、このような非合理的な信仰告白は理解できない。十字架とは、神による(白人の)権力批判である。神は無力な愛でもって、敗北の瀬戸際から勝利を奪い取るのだ。」